Ⅳ－15

貸し農園施設の形態別利用者特性分析

東北大学　学生員○森塚圭一
東北大学　正　員　星　　啓
東北大学　正　員　徳永幸之
八戸工大　正　員　須田　熙

１．はじめに

近年、中山間地域の過疎化や遊休農地への対策として、都市住民が宿泊し農作業をする滞在型市民農園が開設されるようになった。滞在型農園は、従来の近郊型市民農園に比べ投資額が高いにも関わらず需要が少ないことから、利用者属性や効用の分析に基づいた施設整備や広報が必要となる。神吉[1]によれば、滞在型農園希望者は中年の家族連れが農村に触れるという目的が多いという結果が出ているが、これは農村来訪者の意識であり、実際の農園利用者の意識ではない。本研究では、農園利用を目的とした利用者の属性と効用を近郊型利用者との比較により、また、滞在型の中でも形態の違う２タイプ（共同宿泊施設タイプ、１区画１ラウベタイプ）の比較により明らかにする。

２．アンケートの概要

近郊型は、東北地方と新潟県の15農園を対象として平成9年8,9月に、滞在型は群馬県倉淵村、長野県四賀村の2つのクラインガルテンを対象として11,12月にアンケート票を配布、郵送回収した。回収率は表-1に示すとおりである。

３．近郊型と滞在型の利用者属性比較

図-1に近郊型と滞在型の各年齢構成を示す。近郊型と滞在型の年齢構成は有意水準1%で異なり、近郊型では60歳以上の利用者が多いのに対し、滞在型では60歳未満の利用者が多い。そのため表-2のとおり滞在型は有職者の利用者が多い。図-2の来園同行者割合を見ると、滞在型は単独が明らかに少なく、家族や友人と来園する場合が多い。

図-4は利用後の意識を示したものであるが、滞在型と近郊型で、有意水準1%でその比率に差がある項目は、「新鮮な野菜が取れた」「子供に自然体験させた」「新たな交流が生まれた」の３項目であり、近郊型では農業そのものに対する満足度が高いのに対し、滞在型では自然とのふれあいや交流に対する効用が高くなっている。

表-1　アンケート回収結果

	配布数	回収数	回収率
近郊型	991	577	58.2%
滞在型	236	106	44.9%
計	1227	683	55.7%

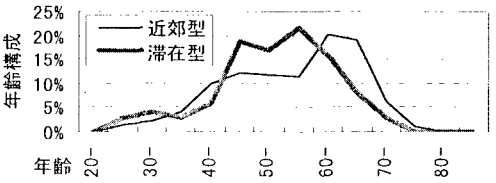

図-1　両形態利用者の各年齢割合

表-2　有・無職の割合

	有職	無職
近郊型	54%	46%
滞在型	70%	30%

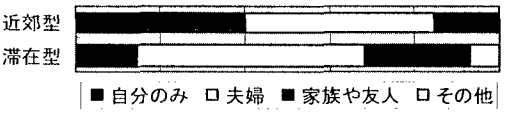

図-2　来園同行者割合

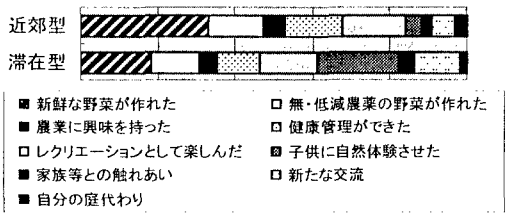

図-3　利用後の意識

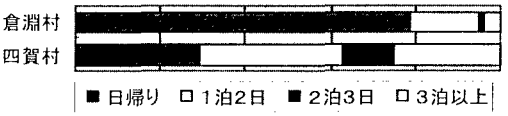

図-4　滞在期間

４．滞在型農園の２タイプの利用者属性比較

同じ滞在型農園でも、倉淵村は共同宿泊施設，四賀村は１区画１ラウベと形態は異なる。両者で利用

者の年齢、有職の割合に有意な違いは見られないが、図-4より、宿泊施設の違いにより倉淵村は８割が日帰りし、四賀村は７割が宿泊している。

利用動機は、倉淵村では「レクリエーションとして楽しむ」や「自然と親しむ」が有意に多かったのに対し、四賀村では「新たな交流を求めて」や「新鮮な野菜が作れる」「無農薬・低減農薬野菜が作れる」が有意に多い。このことより、１区画１ラウベタイプの利用者は共同宿泊タイプの利用者より、明確な目的を持って利用していると言えよう。

５．農園の特性と利用者属性

近郊型の15農園と滞在型の２農園について総面積等の施設とサービスを変数として主成分分析を行った。表-3より、第１主成分(+)は規模が大きく料金が高いことから施設の充実度を表しており、第２主成分(+)は農機具貸出が有り、宿泊施設がないという従来型の市民農園であることを表している。この軸上に各17農園をプロットしたのが図-5である。盛岡、横手、紫波町は簡素型に属しており、仙台市近郊の仙台市民農園、川崎町、大郷ふれあい農園等は設備充実という特徴がある。

次に、各農園利用者の性別、年齢、動機等の個人属性8アイテム（18カテゴリー）で数量化Ⅲ類分析を行った。カテゴリープロットを図-6に示す。横軸は第１固有値(0.21)を表しており、正の領域は「やすらぎ」、負の領域は「農作業」自体を目的としている利用者である。縦軸は第２固有値(0.18)を表しており、年齢層を表している。図-7に、仙台都市圏と滞在型のそれぞれ２農園のサンプルプロットを示す。仙台市の飯田農園と滞在型の四賀村では農作業を目的とする人が多い傾向があるが、倉淵村ではやすらぎを求めて利用する人が多い傾向がある。

６．結論

本研究では以下のようなことが明らかになった。

利用者の年齢構成は近郊型より滞在型の方が若い。また、農園利用による意識は、近郊型が農作業そのもの効用が高いのに対し、滞在型は自然とのふれあいや交流に対する効用が高いという違いが見られる。

農園特性分析より農園は「簡素型」「設備充実型」「滞在型」の３タイプに分類された。また、滞在型は「共同宿泊」と「１区画１ラウベ」とで利用者属性に有意な差はなかったが、利用動機には大きな差があり、今後滞在型農園を開設するうえで、対象利用者を明確にした上で施設整備を進めていく重要性が明らかになった。

表-3　農園の主成分分析結果

変数	固有ベクトル 第1主成分	第2主成分
1区画面積	0.48	-0.24
単位面積あたり料金	0.47	-0.04
総面積	0.52	0.13
農機具貸出の有無	0.29	0.87
宿泊施設の有無	0.44	-0.41
寄与率	0.58	0.18

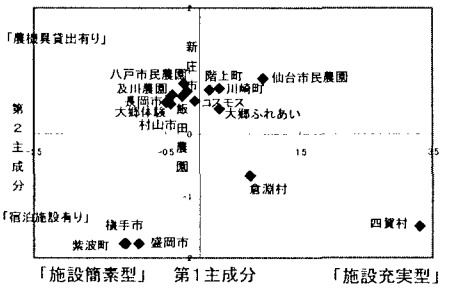

図-5　農園のサンプルプロット

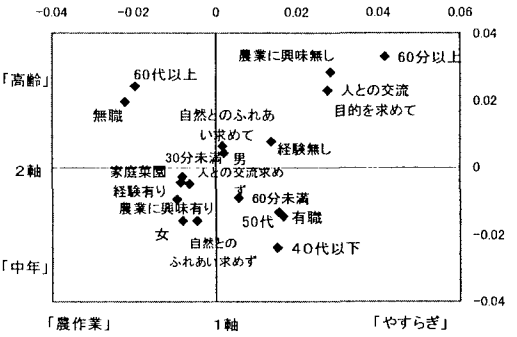

図-6　利用者のカテゴリープロット

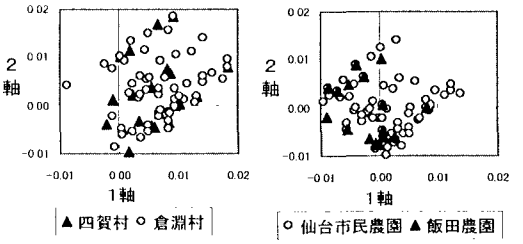

図-7　利用者のサンプルプロット

参考文献

1)神吉紀世子(1996)「グリーン・ツーリズムの取り組みと都市民の余暇活動ニーズの対応に関する研究」都市計画論文集，No31,pp.109-114